ぱちんこ
言葉物語 ㉑

「運の強さメーター」

今回の言葉物語は「運の強さメーター」という言葉を基に、パチンコのリーチ演出というものを掘り下げてみたいと思います。

現在のパチンコを打たれる方であれば、毎回転ほぼ画面や役物が何かしら動いたりしているのをご存じのはずです。しかし、20年ほど時代をさかのぼると、演出はおろか、リーチの演出すらない機種が当たり前でした。即ち、予告演出はおろかリーチ信頼度という考え方すらも無い、非常に淡々としたゲーム性ということができます。

1989年にパチンコに液晶画面を搭載したものが登場し始めると、リーチ後にしばらく最後の図柄が回転し続けるといった形でリーチ演出が始まるようになりました。そして、1992年に豊丸産業から「ピカイチ天国1」というパチンコが登場することになります。

点灯数がリーチ信頼度

この機種は、リーチが発生すると写真にある液晶画面内上部に並ぶ15個のインジケーターが点灯し、その点灯数でリーチの信頼度を表し、全てが点灯すれば期待度MAX!?となる演出が搭載されるもので、当時のパチンコの中では画期的ともいえるものでした。

画面上部の枠線内にあるのが「運の強さメーター」。しかしその後重大な事実が…

しかしこの機種の登場後、あることにユーザー達が気付き始めます。それは「リーチがかかったとき、最終図柄がスロー回転に移行する瞬間の図柄（付近）が結果的に最終停止している」という事実です。これは、リーチ後に図柄が停止するまでの移行コマ数が何故か一定になっていたために起こった珍事件でありました。

そのため、今までメーターの点灯に一喜一憂していたユーザーはリーチの瞬間に画面を凝視して大当りを見極めるようになり、運の強さメーターの活躍は無くなってしまうのでした。

ところがユーザーも貪欲で、それならばと自身の遊技状況に応じてメーターを見たり図柄のスロー移行の瞬間を見たりと使い分け、飽きずに楽しむようになりました。当時は現在ほど多種多様な遊技機が販売されているわけでもありませんでしたので、ユーザーも長く遊技機と遊べるようにと考えていた時代に見つかった珍事と言えるでしょう。

リーチに信頼度の概念を植え付けた先駆者「ピカイチ天国1」
©TOYOMARU INDUSTRY CO., LTD.

発見の「隙」のない現在

今回の言葉物語では「運の強さメーター」という言葉をめぐってお届けしていますが、単に珍事件をお話したいのではなく、記憶に残る遊技機は結果として長く愛されているという事実です。

現に花札をモチーフにした遊技機はその後も数多く登場していますし、「ピカイチ天国」シリーズも同メーカーからその後何回も登場しています。20年経った今でもリーチ信頼度登場の先駆者として語られることからも同機種の功績は明らかです。

では、現在のパチンコで「名機」と語られる機種はどれだけあるでしょう。発売数に鑑みればその比率は非常に少ないはずです。それは名機として記憶に残るほど打ち込まれない遊技機サイクルと、ユーザーが楽しさを発掘しようとしない事にあるのではと感じます。

ユーザーが新たな「発見」を見出す隙を与えない演出フロー等は、映画のように流れてしまい記憶に残り辛くなるでしょう。また、現在では「多少打たないと」という条件すら満たされず撤去されていることも少なくありません。そしてユーザーも怒涛のような演出フローに溺れ、自らその機種の楽しさを探ることもしなくなりつつあります。ユーザーが大小の演出を含め楽しみ尽くせる環境になった時には、きっと今活躍の機種たちを「名機」として語ってくれるのではないでしょうか。

（大和田敏男）

画期的な「演出」の元祖